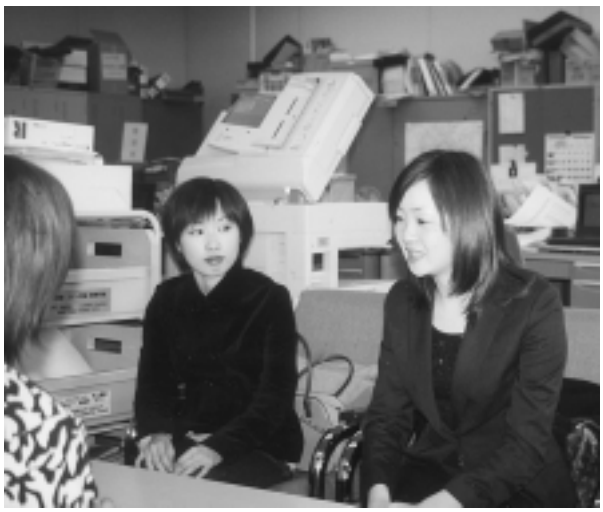
仲良しコンビお見事 司法試験で現役合格

法学部 小原（こはら）　綾乃さん**（右）**
古川　裕子さん**（左）**

ここに自己をギリギリまで試した5人の卒業生に登場してもらった。もちろん失敗もあったが〝挑む〟ことが目的だったから、彼らに悔いはない。司法試験を2人で受けて現役合格した女性コンビ。無人島で自分の肝試しを行った探検部員。みごと日本一の座を射止めて角界入りし、この春場所にデビューした学生横綱。あくまで日本が好きで、就職先も在日の外資系企業を選んだ留学生。以下、学生記者が聞いた「先輩の4年間の総決算」。



司法試験は最も難しい資格試験といわれる。しかも2人は法学部4年生の現役合格という輝かしい記録を打ち立てた。小原綾乃さんと古川裕子さんである。実際に会ってみると勉強疲れといった様子もなく、むしろ可愛いお姉さんといった感じだった。

2人は彼女たちが通っていた予備校の論述答練の時に知り合い、同じ大学とわかったという偶然から、仲良くなったという間柄だ。合格するまでの平均年数が5年といわれるのに、なぜ2人はあえてその難関に挑戦したのか。

法学部に入った小原さんは2年生の秋、自分がいままでやってきた勉強のなかで一番難しい試験ということで、司法試験の道を選んだ。つまり「司法試験は、自分が努力すればそれだけで近づいてくる。常に目標を持って動いている自分を意識していた」ともいった。そして古川さんは高校の時からテレビなどの影響で検察官に憧れていた。そして法学部の門を叩き、2年の春から本格的に勉強を始めた。

この世界の常識でいえば、2人とも始動が少し遅いと思われても仕方ないだろう。ところが実際は小原さんが1年半、古川さんは2年半という短い時間で、現役合格を果たしている。彼女たちの勉強法には秘密があった。まず2人とも試験を受ける回数を3回までと区切っていた。なぜ3回なのか。

司法試験には丙案制という制度があり、これは合格者数のうちの一定パーセントは3年目までの受験者から採るというもので、この制度を利用して受からなかった時は、きっぱりあきらめようと決めてかかった。

また、2人とも学校の近くの予備校に通った。小原さんは自分の勉強時間を2、3時間削って予備校に行き、古川さんは勉強時間と予備校で10時間ほどやっていたそうだ。そして2人とも試験直前には、それ以上やったという。

やはり並大抵の頑張りではなかっ

た。周囲に流されずコツコツと物ごとを進められるという2人だからこそ出来たのであろう。かといって、そんな2人にライバル意識は働いたかというと、あくまでも自分と試験との問題なので、互いにライバル意識は持たなかったらしい。

日頃の生活では、2人とも共通していたのは「規則正しい生活をすることには気を遣った」ということだった。「早寝早起き、日に3食は欠かさず、授業にはちゃんと出ました」ときっぱりいった。小原さんはさらに「自分の性格上、常に目標を設定していないと生きている気がしない」と付け加えた。古川さんは回りが就活をしている時も焦らず、むしろそれを励みにして勉強に打ち込んだし、小原さんは大学4年間を時間のモラトリアムと解釈し、ゆとりを持って過ごした。

そのような日常を送れたのも、2人とも中大に息苦しさを感じず、素朴な感じの校舎が合っていたからそうだ。要するに中大を愛していたのだ。駅伝は常に母校を応援し、プロ野球はジャイアンツの阿部選手のファンでもある。

試験に際し、小原さんは「3回チャレンジできるので、とにかくそれだけに集中しようと思った」といい、古川さんは周囲の変化に焦りを感じたこともあったが、かえってそれをバネにして頑張ったという。明確な目的意識を持ち続けた2人だからこそ、いえる言葉に違いない。司法修習後の進路について尋ねたら、小原さんは「漠然とだが、裁判官への道を進もうと思う」。古川さんは「高校生の時からの希望どおり検察官の道に進みたい」といってくれた。

最後に小原さんに後輩に向け、古川さんには司法試験を勉強中の後輩へ、それぞれメッセージをいただいた。「やりたいことを見つけ、方向を決めることは大変ですが、それが可能であれば自分で決めたことはやっていけます。やはり、やるべきこと、やりたいことを見つけることです」（小原さん）。「結果が出ないからといって早いうちから見切りをつけず、最後まで粘って頑張ってください」（古川さん）。終始、素敵な笑顔で話してくださったが、2人の優しさの裏に持ち合わせた強さは、半端ではないなと思った。

学生記者（柿元理策　野倉早奈恵）

新たな自分見つけた 無人島のサバイバル

文学部 加藤 真祐さん

「僕は皆からよく怖いっていわれるんですよ」。ご本人がいうとおり、決して気軽に話しかけられそうなタイプではなく、一言一句を考えてから言葉を選んで話す男っぽい感じ。初対面の私は正直いって、どう話を進めていこうか戸惑ってしまったが、「探検」の話に及ぶと、いきなり視線が鋭くなり、口調も熱を帯びてくる。話は一気に弾んだ。

4年前の入学式の後、「探検」という言葉にひかれて探検部入部を決意した。当初は夏休みやゴールデンウィークなど、まとまった休みには富士の樹海や山にこもってキャンプなどを体験していたが、長期の活動に備えて、週末に奥多摩などでトレーニングを丹念にやってきた。

そんな中で加藤さんは心に秘めていた企画があった。2週間の「無人島でのサバイバル挑戦」は、3年生の時に隊長として企画したものだった。その地を鹿児島県の種子島から

船で30分ほどの「馬毛島（まげしま＝西之表市）」に決めた。

無人島での生活は、日の出とともに始まり日の出とともに終わる。そして毎日の日課はなんといっても食料探し。収穫があればその日の食事はあるが、収穫がなければ当然のことながら食事もない。

そこで加藤さんをはじめ、隊員たちはさまざまなものを口にした。生のソテツ、ナマコに似た黒い生き物、磯で採った貝……。しかもお腹が一杯になるほどの量が採れるわけでもないし、とても一日の体力を回復させるものでもない。しかも、「ナマコに似た生き物は有毒らしい」と分かったが後の祭。幸い隊員のなかに重症者は出なかった。

島に廃校の後に、井戸があったということが唯一の救いとなったが、全員が体力的、精神的にも限界を超えていた。「モノに溢れた日々の生活から切り離されると、人間ってなんてだらしない存在なのか」と、みんなが思ったという。

普段は隊員とともに固まって寝るのだが、ある夜、加藤さんは1人で小高い丘の上で一夜を過ごすことにした。身も心もクタクタになり、寝転んで空を見上げていたら、加藤さんは不意に孤独感に襲われた。

この世の中に自分1人しかいないような感覚に陥った。そして、どのくらい時間が掛かったか。あるいは一瞬だったのかもしれない。加藤さんに一つの答えが浮かんだ。「人間はみな孤独である」ということだった。だれも「加藤真祐」という人間の表面に触れることはできても、骨まで中身まで触れることはできないのだ。つまり、人間とは誰もが孤独と常に隣り合わせで生活しているのだ。だからこそ人間同士のつながりがあり、そこに優しさ、いとおしさ、憎しみや悲しみが存在するのではないか。

「一見、当たり前かもしれないが、このことに気がついたことで自分が変わった」と加藤さんはいった。それまでは部のなかの責任や肩書など、些細なことにこだわり続けた自分の小ささを感じたという。そして今回の無人島サバイバルを通して、自分の行動に余裕が持てるようになったこと、あるいは自分が一回り大きくなったことを実感した。

卒業後の進路は、立教大学の大学院に進む予定だ。加藤さんは大学生活のなかで探検部と同様、映画が大好き。年に300本近くの映画を見ている。大学院では比較文明学を専攻し、将来は日本映画の研究をしたいそうだ。

最後に中央大学の後輩たちへのメッセージを伺った。「どんな形でもいいから、自分を追い込むこと。人間を極限まで追い込むと、そこから再生しようというパワーはすさまじいものがある。ぜひ、それを体験して、ひと回り大きな人間になってほしい」。なるほど、自分を極限まで追い込むことは、決して楽なことではない。しかし、それを乗り越えた加藤さんからは、自分に自信を持って生きているように感じた。

（学生記者・伊藤　由紀）

主将務め力メキメキ 学生横綱で有終の美

法学部 成田　旭（あきら）さん

昨年秋の全国大学相撲選手権で、「学生横綱」という輝かしいタイトルを射止め、この3月の春場所で幕下付け出し15枚目格で尾車部屋から

プロデビューする4年生がいる。

身長171㌢、体重138㌔の成田旭さん（法学部政治学科）は、その時に授与された金メダルを下げてインタビューに応じてくれたが、私にすれば、その体格にメダルはとても小さく見えた。しかし、この世界では彼の体格は小さい方である。「僕はどうも飯が弱いんですよ。朝どんぶりで1杯、昼2杯、夜3杯という程度です」。相撲界では飯をたくさん食べる〝飯が強い〟人が強くなるといわれるそうだ。それを信ずる成田さんは、もっと体が大きくなって欲しいと思っているが、「飯が弱いからといって別に調子が悪いというわけではないから、特に気にはしません」といいきった。

そして頂点の「学生横綱」になった時の心境を話してもらった。始めは「本当に、俺でいいのかな」と思ったそうだ。強気な答えを期待していただけに肩透かしを食った感じだった。実は彼は前年の国体で優勝し、この時、幕下付け出し15枚目格を獲得していたので、そのあとの大学相撲選手権で学生一になるなんて、思ってもみなかったという。

そのへんを彼は「自分が中大相撲部の主将として、みんなを引っ張るんだという気持ちで稽古を続けていたら、いつの間にか実力が伸びていったという感じ」と説明してくれた。中大相撲部は全国の大学でも指折りの練習が厳しい部として知られている。

その精神を成田さんはよく承知しているようだった。「先輩の中には口ではいっても、それを自分は実行しないっていう人がいました。やっぱり、そういう人に自分は反感を覚えていたし、そんなふうになるまいと思っていました」。主将になってからはトレーニングは人一倍やり、積古に励む姿を後輩に見せてきた。責任感が強い人だと思った。

中大に入学する、そもそものきっかけは、成田さんが高校1年生の3月に郷里の秋田県から強化選手として、中大の合宿に加わったことだった。成田さんは中大の練習を見て「いい稽古をしているなぁ」と、すっかり魅了されてしまった。

相撲で支えにしている言葉は「無心無欲」。その心構えで取り組むと最高の力が出せるらしい。そんな成田さんのあこがれの力士は初場所で措しくも優勝を逃がした千代大海関で、彼の突き押し相撲のスタイルをとても尊敬している。

角界デビューを前に彼はいま、髪を伸ばしている。春場所千秋楽は卒業式前日の24日だ。「晴れた気持ちで卒業式に出たいから、いい結果を出したい」と早くも気迫が十分こもっていた。最後に中大生へのメッセージとして何か一言といったら、即座に「自分を信じて前向きに」といった。これを4年間ひたすら実行してきただけに、その一言の響きは重かった。

最近、大相撲の人気低落が目立つ。成田さん！ 成田さんの角界デビューで、どうか土俵に新風を吹き込んでください。

（学生記者・柿元　理榮）

チュウダイ バンザイ
国際派の感覚を磨く

経済学部　リー・シンシアさん

（マレーシア留学生）

僕は日本生まれのパキスタン人学生で、「日本人学生と留学生との中間の感覚を持つ」存在と自認している。僕の感覚がリー・シンシア（李

沁霞）さんにどこまで通じるか。彼女の4年間の話を聞くことは、そういう意味でも決して無駄ではないと思い、〝国際派のリーさん〟に登場していただいた。

マレーシアで生まれ育ったリーさんは高校卒業後、日本語を学びたいと思っていたことから、日本に在住しているおばさんの勧めもあって、日本への留学を決意した。日本語学校で1年間学んだ後、中央大学経済学部国際経済学科に入学、いまや周囲がびっくりするほど日本語も上手になった。それどころか、自国のマレーシア語、英語、中国語と4ヵ国語を操るまでに成長した。

「大学生活はまるでエベレストに登るかのようにエキサイティングでした。始めは頂上まで行けるかどうか不安でしたが、登頂したいまでは〝やればできるんだ〟と思うようになれました」と、まずは現在の心境を話してくれた。

リーさんはいつも思う。「どうして留学生は日本人との間に壁を作ってしまうのだろう」。確かに留学生仲間が国別に固まってしまう中で、リーさんは違った。自分が外国人であることを意識せず、自ら日本人との交流を求め、ゼミやバイトにも積極的に取り組んだ。

ゼミは先輩の勧めで田中拓男ゼミに入った。先生は学生が興味を持つものは何でも勉強させてくれたし、やる気があれば先生はどこまでも応援してくれた。自動車産業の研究のためにアメリカまで企業訪問までした。「就職活動をひかえた頃、ゼミのOB・OGが面接や自己分析の手伝いをしてくれたり、とても心強かった」という。

バイトは大学食堂の、「四季」で3年間。すっかり〝四季の顔〟になった。バイト仲間とはとても仲良く、それぞれの誕生日の前夜には夜通しカラオケをやるのが恒例というほどの「遊び学科生」でもあった。

そういえば僕は日頃、留学生のバイト優先の生活に疑問を持っている。「バイトの合間に学校へ来ている感じ」なのだ。これでは話が逆ではないかということを、リーさんに聞いてみたかった。すると、「確かに留学生の中にはバイトばかりしている人もいますが、いくら経済的事情はあるにしても、日本人学生と交流を持たなければ、なんのために日本の大学で学んでいるのか意味がありません」とハッキリといった。

大学生活で自分が一番成長したのは就職活動だったという。それは、大学生から社会人になっていく、いまの段階で、自分がどういう人間なのかがわかったことだ。結果ではなく、プロセスの中で自分ががどのように変わってきてきたかを把握することは大切というのが、彼女の考えらしい。

リーさんは将来の人生設計も考えている。就職は彼女にとって新たなプロセスのスタートでしかなく、「仕事でステップアップするためにも、仕事をしながら大学院で経営学の資格を取りたい。日本だろうと母国だろうと、国は関係なく自分のキャリアを高めていきたい」と話す。取材する側の僕は、向上心満々の彼女の熱気にすっかり当てられてしまった。

リーさんは最近、大学から見る青い空や通学中のモノレールから見える真っ白い富士山に、とても感激する。「何から何まで、すべて母国がいい」と思わないところが、いかにも〝国際派のリーさん〟らしかった。

「私は相手が来るのを待つのではなく、こちらの方から積極的に歩み寄る努力を続けました。自分からオープンな心で触れ合えば、すぐに友だちになれるもの」。

その意味では僕もリーさんの考え方に大賛成だ。

最後に、後輩に対して、あるいは留学生に対して一言。「悔いのないよう、どんどん挑戦してほしい。そして何よりも中央大学に誇りを持ってほしい」。さらに「私は中大はすごい好きとも。」取材中のリーさんは終始、笑顔を絶やさないのところが素晴らしかった。

（学生記者・シディキ　ムニブ）

それぞれの挑戦